

概 要
<p>第 26 回 市民と市長の対話ひろば ～もりりと語ろう、宝塚市の未来～ テーマ：文化芸術センター（たからば）・手塚治虫記念館周辺のにぎわいづくり</p>
<p>日時：令和 8 年 5 月 16 日（土） 午前 10 時～午前 11 時 30 分 場所：西谷会館 屋内活動室 参加者：9 名 出席者：森市長 都市安全部 江崎部長 他 産業文化部 鈴木部長 他</p>
<p>《市長のテーマ説明》</p> <p>1. 開催趣旨と対象エリア</p> <ul style="list-style-type: none"> ・文化芸術センター（たからば）周辺エリアの今後の方向性や活性化について、市民からアイデアを募り意見交換を行いたい。 ・宝塚大劇場、手塚治虫記念館、宝塚文化創造館、花のみち、武庫川河川敷などは人が集まる、宝塚の観光・文化・商業の中心地である。 <p>2. 周辺施設の現状と課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・手塚治虫記念館：1994 年開館の全国有数の重要施設だが、来館者数が一時期より減少傾向にあり、回復・増加を図りたい。 ・宝塚文化創造館（宝塚音楽学校旧校舎）：2 階のすみれミュージアムなど、地域の歴史を伝える貴重なコンテンツである。 ・ガーデンハウス（文化芸術センター庭園内）：現在は休憩所やピアノ設置場所として利用されているが、やや活かしきれていない印象がある。 <p>3. 歴史的背景とエリアのポテンシャル</p> <ul style="list-style-type: none"> ・小林一三氏の時代から、阪急電鉄と協力して人が集まる場所としてプロデュースされてきた歴史（ルナパーク、ファミリーランド、ガーデンフィールズなど）がある。 ・かつてのように広域から多くの人々を引きつけるため、どのようなテーマと方向性で成長すべきか知恵を絞る必要がある。 <p>4. 宝塚市立文化芸術センター及び宝塚文化芸術センター庭園（たからば）に係る管理運営の基本方針</p> <p>現在は指定管理者制度を導入し、以下の 5 つの方向性で管理運営を行っている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・魅力の継承と創造：ゆかりのあるアーティストの展示（例：中村祐介展などによる若年層の集客）。 ・想像力の育成：子どもから大人までを対象としたワークショップや体験イベントの開催。 ・コミュニティの形成：ボランティアによる植栽や、ライブラリーでの交流の場づくり。 ・地域の活性化：おおやね広場でのマルシェ（西谷野菜の販売など）やショップの展開。 ・地域課題の解決への貢献：イベントを通じた社会的・都市的な課題解決や、子ども向け

イベントの実施。

5.手塚治虫氏生誕 100 周年に向けて

- ・2028 年 11 月の生誕 100 周年、この節目（前後含む）を契機としてエリアを盛り上げたい。
- ・100 周年の一時的な集客で終わらせず、次世代へ宝塚らしさを継承していく変化のきっかけとする。
- ・市が一方的に方針を決めるのではなく、市民と対話しながらテーマ性を揃えていきたい。準備期間を考慮すると、今から動き出す必要がある。

6. 意見交換に向けた問いかけ（本日のお題）

- ・かつてのファミリーランドのように、賑わいが絶えない場にするためのアイデアを聞きたい。
- ・市の財政難を踏まえ、公費投入だけに頼らない商業活動の可能性も含めた視点を持ちつつ、人が集まり、かつ宝塚らしさを再確認できるような具体的な提案を期待する。

《対話》

1 参加者【西谷地域からのアクセス向上について】

- ・文化芸術センターの供用開始前には、理想を話し合う会議に何度も参加したが、実際に完成してからは数回しか行けていない。
- ・広報を見て行きたいと思うイベントはたくさんあるが、西谷地域からのアクセスの壁がある。かつての長谷牡丹園のように、イベント開催時に西谷から直行バスが出るような仕組みがほしい。

→市長

- ・文化芸術センター自体の立地（JR、阪急宝塚駅から徒歩圏内）を変えることは難しいため、課題は西谷地域からのアクセス（移動手段）にあるかもしれない。
- ・今後、内容を詰めていく予定のスクールバス+AI オンデマンドバスの仕組みにおいて、住民がまとまって移動できるような柔軟な運用ができないか、アイデアの一つとして検討の余地がある。今後予定されている意見聴取の場でも、ぜひ意見を出してほしい。

2 参加者【小林一三氏・手塚治虫氏をテーマにした資料館と研究の充実について】

- ・小林一三氏について、宝塚文化創造館などのスペースをより大きく活用し、宝塚の街づくりの祖である小林一三氏に焦点を当てた資料館・博物館を設置すべきではないか。
- ・手塚治虫氏について、道徳の副読本では平和が中心に描かれているが、勧善懲悪こそがテーマだという見方もある。手塚治虫氏の作品の真意や本質はまだ明らかにされ尽くしていないと感じるため、市として研究会などを実施してはどうか。

→市長

- ・小林一三氏について、同様の意見は他地域の対話の場でも出ており（本拠地は宝塚であるのに博物館が池田市にあるという声など）、展示のあり方についてぜひ検討していきたい。
- ・手塚治虫氏について、手塚治虫氏の作品は一般的な漫画・アニメの枠を超えた深いテーマ性を持っている。著作権との兼ね合いはあるものの、作品を文学的に深掘りするような

研究やアプローチは有意義である。

・現在、大阪大学医学部が手塚治虫氏を再発見する試みを企画しており、市としても連携の協議を進めている。科学技術など新たな視点も含め、両氏の功績や魅力を捉え直す視点は非常に重要であるため、今後の街づくりに活かしていきたい。

3 参加者【手塚治虫記念館と西谷地域を繋ぐ自然体験・教育循環について】

・リピーターを増やし地域を潤わせるためにも、手塚治虫記念館と市域の3分の2を占める自然豊かな西谷地域を繋ぐべきである。

・手塚治虫氏の原点である虫や自然に着目し、子どもたちが西谷で虫取りやダリア・蜂蜜などの自然の循環に触れられる機会を作ってはどうか。

・週末だけでも手塚治虫記念館と西谷（宝塚自然の家）を結ぶバスを運行し、子どもたちの学習の場や、西谷の小学校の国際バカロレア教育へと繋げてほしい。

→市長

・手塚治虫氏が幼少期に過ごした頃の御殿山一帯の自然環境を、現在の西谷地域を舞台に再プロデュースするという視点は、宝塚市全体にとっても大きな役割になり得る。

・予算や路線の維持など交通面での即時対応（週末の直行バス運行など）は現状かなり厳しいが、子どもたちの学びの場や西谷の魅力を外に発信していく取り組みとして、何らかの形で連携や接続ができないか検討していきたい。

4 参加者【周辺エリアのアクセスの課題と映像技術を活用したエンターテインメント性について】

・鉄道駅から徒歩圏内ではあるものの、現在のたからば周辺は場所が分かりにくく、周辺道路や駐車場も狭い。現代は車で集まる郊外型施設が主流のため、道路整備や駐車場の確保が必要ではないか。

・文化や芸術をテーマにした施設は高尚で、一度見たら満足してしまい何度も行きにくい。かつての宝塚ファミリーランドのように、親から子、孫へと世代を超えて何度も訪れたいような、子どもが遊べるメインコンテンツ（要素）がもう一つ必要である。

→市長

・駐車場やアクセスの整備も重要だが、まずは何度も来たい中身（コンテンツ）を先に作るのが最優先である。

・大阪・関西万博に行った際や東宝株式会社本社訪問時には、現代のエンターテインメントは大型の物理アトラクションを建てずとも、最新の映像技術（没入型コンテンツなど）によって省スペースかつ安価に実現できる時代になったと感じた。

・宝塚市には映画の街としての歴史もあるため、映像や新しいデジタル技術を融合させた、リピートしたくなる体験型コンテンツの導入が有効ではないか。市が直接運営するだけでなく、民間企業の商業活動として参入してもらう手法も含め、魅力的な中身とそれに伴うアクセス整備をセットで考えていきたい。

5 参加者【手塚治虫作品の世界観体験と西谷地域への展開について】

・鳥取県境港市のゲゲゲの鬼太郎のように、子どもや孫が感性で会いに行きたい写真を撮りたいと思えるような、手塚治虫氏の作品の主人公に出会える象徴的なスポットが今

の宝塚には見当たらない。

・手塚治虫氏が昆虫や自然を愛した原点である御殿山は現在都市化している。そのため、手塚治虫氏が幼少期に自然から受けた感動を体験できる代替地として、西谷地域を同氏の自然愛の延長線上にあるエリアと位置づけ、宝塚自然の家などに子どもを引きつけるコンテンツを作ってはどうか。

➡市長

・街のアニメの聖地化を進める上で、そこに行けば手塚治虫氏の作品の世界観に触れられる・体験できるという視点や、手塚治虫記念館を含めた聖地化、写真映えする場所（コスプレイベント等での活用など）の創出は非常に重要である。

・我々が子どもの頃に手塚治虫氏の作品から受けた感動や新しい世界観（科学のワクワク感など）が、現在の手塚治虫記念館などのコンテンツでは十分に表現しきれておらず、物足りなさがあるのも事実。手塚プロダクションとの調整など一定の制約はあるが、この表現方法については突き詰めていきたい。

・こうしたアイデアを役所の中だけで考えると硬直化してしまうため、専門知識を持つ様々な外部の人材に伴走・協力してもらいながら、西谷との連携も含めて具体的な形にしていきたい。

6 参加者【万博の事例を踏まえた限られたスペースや工夫で感動を与える演出について】

・関西万博で、鏡を使って空間を広く見せるシンプルな休憩スポットに強く惹きつけられた。大きな立派な建物を建てなくても、鏡の効果で空間に大きな広がりを感じ、居合わせた高校生たちも感動していた。

・感動を与えるために必ずしも大規模な施設は必要なく、視覚的な効果や科学的な技術を取り入れた単純な工夫次第で、狭いスペースでも十分に人を魅了するコーナーは作れるのではないか。

➡市長

・時代の潮流や市の財政面からも、今後新しく大きな箱物（施設）を増やしていくつもりはほぼないため、提案の方向性に強く共感する。

・先ほどの映像技術の話と同様に、USJ の最新アトラクションなども映像や視覚効果を駆使する方向にシフトしている。鏡の事例のように、人間の視覚や五感を刺激するちょっとした知恵や工夫こそが、これからのエンターテインメントに求められる要素である。

・提示された工夫で楽しませるといったコンセプトを大切にしながら、視覚効果をはじめとする新しい表現方法についてさらに研究し、今後の施策に活かしていきたい。

7 参加者【子どもの関心を引くアニメ上映の仕組みとたからばでのイベント展開について】

・大人は一度行くと満足しがちだが、子どもや孫が興味を持てば大人も一緒に動くため、まずは子どもを惹きつける仕掛けが必要である。

・現在の子どもの多くは鉄腕アトムを詳しく知らないが、今見ても新鮮で面白い作品である。通常、児童館や学童保育などの現場では上映権（著作権）の壁があり映像を流すのが難しいため、市が公式に安心して使える映像コンテンツを無料貸出する仕組みを

作ってほしい。

・児童館などで事前にアニメに親しんだ子どもたちを対象に、夜間にたからばの壁面を使ったプロジェクションマッピングや屋外上映会を開催すれば、あの時のアニメを大きな壁で見られると、家族連れで何度も訪れる動機になる。

→市長

・著作権（著作権）の課題を市が間に入ることや、各地での上映会、さらには壁面を使ったプロジェクションマッピングといったアイデアは非常に面白く、実現に向けて前向きに考えたい。

・現代の他の流行アニメと違い、手塚治虫氏の作品はすでに社会的地位が確立されており、内容の安心感・信頼感があるため、市としても展開しやすいという利点がある。映像の古さに今の世代がどう反応するかという面はあるものの、作品が持つ斬新さや新しさを子どもたちに再発見してもらおう契機にしたい。

・2028年の生誕100周年をチャンスと捉え、大人の理屈だけでなく、子どもたちが純粋に楽しめる無料上映などのアイデアを具体的に検討していく。

8 参加者【屋外上映会の過去の事例と身近な文化芸術の展開について】

・以前に若手市職員のプロジェクションマッピングの企画で、西谷の大原野神社で『アナと雪の女王』の野外上映会が開催され、非常に楽しかった記憶がある。

・先ほど出た手塚治虫氏の作品の上映会もぜひ実現してほしい。また、高齢の家族を病院へ連れて行った際、受付に『ブラック・ジャック』の漫画が置かれており、待ち時間に読んで感銘を受けた。このように、生活の中の身近な場所で同氏の作品に触れられる環境があるのは素晴らしいことだと思う。

→事務局

そのイベントは、当時の若手職員チーム（チームたからづか）がアイデアを出し合って事業化した取り組みによる野外上映会である。当日は雨が降り運営が大変だったというエピソードも聞いている。

→市長

・開放感のある屋外での上映会は非常に魅力的である。天候に左右されるリスクはあるものの、著作権などの諸課題を市側でクリアできれば、実施できない理由はないため前向きに考えてみたい。

・先日、別の地域（西公民館）での対話の場でも、武庫川河川敷で行われた『山月記』の演劇に感動し宝塚市民でよかったと感じたという声があった。

・特定の施設（たからば等）の中だけで完結させるのではなく、市内どの地域にいても文化芸術を身近に楽しめ、誇りに思えるような工夫こそが、これからの市に必要な視点である。

9 参加者【対話集会のあり方と市全体のテーマ共有について】

・西谷の住民であっても、自分たちの地域のことだけでなく、南部を含めた宝塚市全体の動向や文化について知る必要がある。地域に閉じこもって井の中の蛙にならないためにも、今回のような市全体のテーマを扱う場は大変有意義である。

・テーマ（国際バカロレア教育など）によって参加者の数や層に偏りが出る傾向があるた

め、より多くの市民が地域を越えて関心を持ち、市全体をともに考えることができるよう、集客方法や広報活動にもう一工夫ほしい。

➡市長

・対話集会は、時間帯や曜日を毎回バラバラに設定し、市民が都合に合わせてどの会場へも参加できるようにしている。実際に西谷での開催回に南部（山本周辺など）の住民が参加するケースもあり、緩やかな交流は生まれている。

・国際バカロレアのような教育・子育てテーマは市内全域から熱心な参加者が集まる一方、今回の文化芸術に関するテーマは（他会場も含め）生活に直結する行財政改革や医療費のテーマに比べて参加者が少ない傾向があり、テーマによる濃淡は一定網羅せざるを得ない側面がある。

・農業などの繁忙期にあたる季節や、平日の午前中といった開催日時の調整は、会場確保の兼ね合いもあり苦労しているのが実情である。しかし、住民が地域に囚われず市全体の課題に目を向ける視点は非常に大切であるため、より参加しやすくなるような運営上の工夫は今後も担当部とともに考えていきたい。

10 参加者【地域の特性に応じた対話集会の開催方法と広域連携による課題解決について】

・西谷地域での開催では、毎回同じ顔ぶれによる発言に偏ると意見の広がりには欠ける。西谷地域での開催頻度をあえて少し減らし、その代わり市長が来るなら行こうと多くの多様な住民が集まるような、特別感を持たせる開催方法にしてはどうか。

・医療、移動、買い物などの生活実態において、西谷住民は宝塚市内だけでなく、歴史的・地理的に繋がり深い三田市や猪名川町に依存している。市単独の現行の枠組みで考えても施策は出尽くしており、近隣自治体と枠を超えた連携をしない限り、根本的な課題解決は果たせない。

・西谷地域で増えている荒地や道路沿いの雑草について、住民有志で集まり草刈りをやっている。こうした場での対話をきっかけに市職員も現場を見て対応を始めてくれており、話し合いの場があることは確実な前進に繋がっている。

➡市長

・毎月のように開催するのではなく、西谷の未来に関わる特定の重要テーマ（医療、学校、交通など）に絞り込んで議論する仕組みや、開催頻度の工夫は検討に値する。

・市の地図（行政区画）だけで物事を捉える発言になりがちだった。住民の生活圏を最優先に考えれば、近隣自治体との広域連携は不可欠である。直近でも三田市長や猪名川町長と対話を行っており、今後は各役所の担当者が集まって一緒に西谷周辺の交通・医療圏などを考えるような、新しい枠組み（発想の転換）を模索したい。

・豊かな自然（里山）は放置して維持できるものではなく、住民の手が入り続けることで保たれる。耕作放棄地や荒地の問題に対し、市が一方的に課題を設定するのではなく、住民の危機意識や工夫をしっかり聞きながらともに解決に向けて共有していきたい。

11 参加者【耕作放棄地の活用と関係人口を巻き込んだ環境維持活動について】

・田んぼの放棄地が非常に多く、1年放置するだけでも雑草の成長は凄まじい。都市部に住む人には想像しにくいほど荒廃が進んでいる。

・市がいくつかの耕作放棄地を体験エリアとして指定・確保し、都市部の大人や子どもが虫取りや草刈りを楽しめる場にしてはどうか。

・スポーツジムで毎日熱心に汗を流しているシニア層などの有り余る体力を、西谷の草刈りなど地域の価値になる活動にお手伝いとして繋げられれば、双方にとって有意義である。草を刈り、汗をかいて食べるご飯の美味しさは、都市部の人にとっても魅力的な体験になる。

→市長

・宝塚市南部（都市部）の住民も含め、西谷を応援してくれる関係人口を増やし、ともに地域の維持に関わってもらうという視点は非常に大切である。

・放棄地の所有権や安全管理など、一筋縄ではいかない部分もあるため安請け合いはできないが、市だけでできること・住民だけに負担してもらうことの双方に限界があるため、知恵を絞って枠組みを考えていきたい。

・今回の対話を通じ、西谷の個別課題をどう扱うかと西谷会館での集会のあり方を並行して見直していく必要があると感じた。今後もこういう場がほしいという提案があればぜひ寄せていただきたい。西谷を本当によくしていくために、引き続きしっかりと考えていく。